謎多き古代山城

甦った天空の城
鬼ノ城シンポジウム

鬼ノ城の整備は、目で見て実感できるフィールドミュージアム（野外博物館）を目指し、西門一帯を中心に行われ、今年３月に一区切り。それを記念し開かれたシンポジウムでは、整備の過程で得られた成果を基に、鬼ノ城の姿が議論されました。

今後３年間は、南門や東門、礎石建物などの遺構の保護を中心とした整備を進めていきます。しかし、発見されて40年、鬼ノ城の築城時期といった多くは未だ謎のままです。

西門

鬼ノ城整備のシンボル的存在の西門。３間×２間の建物で、通路の大きな敷石には、門扉の軸受けやけ放しなどの加工が見てとれる。柱と柱の間の距離や柱の本数が南門とほぼ同規模であり、どちらが正門か意見が分かれる

10年の歳月を経て威容を世に示す

手前の第０水門から版築による城壁、高石垣、敷石、西門など、平成13年度以降10年をかけ整備した西門一帯を望む。一見別に見える高石垣と土塁は、一体的な作り方であったと見られる。城壁前の敷石は、きれいに整然と並べられている

北門

北門はほかの城門と異なり、門の中央に排水用の排水溝をもつ。西門を除くすべての城門が、門の通路と城外とに大きな段差がある。防御のための構造だと考えられる

板塀敷石

城内側から見た城壁の上部。城壁と平行に、敷石が整然と並べられている。発掘された柱穴を基に板塀を復元。板塀の位置が城内側に寄っており、板塀の外側は幅の広い犬走りのようになっている。シンポジウムでは、城壁の上部がある程度流れ落ちることを想定して、城内よりに板塀の位置を決めたのではとの考えが示された

角楼

防御用施設と考えられる角楼。城壁から突出した位置に造られており、西門とともに、敵の進行ルートをおさえる要所である。写真右下の道にはカラー舗装が施され、城壁が続いていたことを示している

鬼ノ城整備写真展を５月17日から22日まで、市民ギャラリーで開催した。工事風景や空撮など約160点の写真、城壁の模型などを展示。訪れた人たちは整備の様子を振り返っていた

鬼ノ城シンポジウムで、鬼ノ城の発見から今日までのあゆみや、発掘成果などの概要を説明する村上幸雄さん